語用論とコミュニケーションの発達

日本発達心理学会言語発達分科会・新学術領域共創的コミュニケーションための言語進化学認知発達班 共催

企　　画：	小林春美	（東京電機大学）
	高橋 登	（大阪教育大学）
	田中みどり	（女子栄養大学）
	大伴 潔	（東京学芸大学）
司　　会：	小林春美	（東京電機大学）
話題提供者：	岸本 健	（聖心女子大学）
	安田哲也	（東京電機大学）
	松井智子	（東京学芸大学）
	藤野 博	（東京学芸大学）
指定討論者：	大伴 潔	（東京学芸大学）

[企画主旨]

日常の言語使用では、発話の表面に表れた意味（文字通りの意味）と発話から解釈される意味（発話意図）は一致していない場合がある。たとえば、部屋が寒く感じるので「寒いですね」とその部屋の持ち主に対して言った場合、この表面的な発話には全く含まれていない「もっと暖かくしてもらえませんか」というような話者の意図が伝わるであろう。こうした人間の実際の言語使用における意味解釈の際に必要となるのが語用論の能力である。近年では語用論は伝統的な言語学における音韻論、意味論などと区別されるのではなく、むしろいずれとも深く関係し言語機能を作り出すものであると主張されている。さらにはスペルベルとウィルソンによる「関連性理論」(1986, 1995)に代表されるように、「聞き手は話し手の意図をどのように推測し解釈するのか」を探求する、先端的な学問領域としても台頭してきている。話し手の意図の解釈は、コミュニケーションの基本であり、自閉症児の療育というような臨床的観点や、人間の言語・コミュニケーションの進化の解明、さらには機械知能による会話の実現など、幅広く学際的な観点を提供し得る。本シンポジウムでは語用論・コミュニケーション能力の発達について実験的手法を用い研究に取り組んでいる研究者に講演いただき、乳幼児期から学童期・青年期に至るスパンで、それぞれの発達段階における語用論・コミュニケーション能力に関する課題とそれを解明する研究を紹介いただき、療育・教育へ生かす観点からの討論も行う。

［文献］

Sperber, D. & Wilson, D. (1986/1995). Relevance: Communication and cognition (2nd Ed., 1995). Cambridge, MA: Harvard University Press.（スペルベル，D.，ウィルソン，D. 内田聖二・宋 南先・中逵俊明・田中圭子(訳)（2000）．関連性理論−伝達と認知．研究社出版.）

乳幼児による直示的ジェスチャーの発達と養育者の応答

岸本 健（聖心女子大学）

1 歳齢頃の乳幼児は，まだ言葉を十分に操ることはできないが，指さしなどの直示的身振りにより，養育者と意思疎通を図ることができる。ところで，意思疎通を図るには，互いが互いの意図するところを読み取り，適切に話題を提供せねばならない。直示的身振りを産出する際，乳幼児は養育者の意図を読み取っているであろうか。また，乳幼児による直示的身振りに対し，養育者はどんな意図を読み取るのだろうか。本発表の前半では，話題提供者の研究（Kishimoto, 2017）を含め，乳幼児が相手の心的状態に応じ直示的身振りの産出を調整するか検討してきたこれまでの研究の流れを紹介する。後半では，直示的身振りに込めた乳幼児の意図を，養育者がいかに推測するかについて，身振りに対する養育者の応答から検討する現在進行中の研究について紹介する。本話題提供を通し，乳幼児と養育者とが，いかにコミュニケーションを成り立たせるか考えたい。

［文献］

Kishimoto, T. (2017). Prelinguistic gesture use in mother-infant and mother-infant-sibling interactions. *Interaction Studies*, 18, 77-94.

幼児における「数量詞を用いない」数量的理解の発達

安田哲也（東京電機大学）

語意味を学ぶために社会的手がかりを利用することが重要である。その社会的手がかりは非言語情報だけではなく、社会的な文脈を利用することも含まれる。本発表では、どのように他者の意図を読むのかに着目して、スカラー含意(尺度含意)に焦点を当てた実験を紹介し、意図共有の観点から議論を行う。スカラー含意(e.g., *Some*, *All*)とは、関連する語意味の間にスケール(scale)を想定し、人はある意図を伝えるために適切な語を選ぶとする際に働く推論である(Katsos, 2014 等)。含意はある意味を否定した結果、生じる場合がある(It‘s warm today, 含意:今日は暑くはない)。敢えて言わないということにより含意が発生するのであれば、グライスの協調原理(Grice, 1967/1986)に則したような解釈が行われることが考えられる。本発表ではこのスカラー含意について発達の観点から知見やその示唆を提示し、語用論の能力で重要である意図の推測について議論を行う。

［文献］

Papafragou, A., & Musolino, J. (2003). Scalar implicatures: experiments at the semantics–pragmatics interface. Cognition, 86(3), 253-282.

Yasuda, T., & Kobayashi, H. (January. 2019). Comprehension of weak and strong scalar implicatures in Japanese young children and adults. Budapest CEU Conference on Cognitive Development, PA 006, Budapest, Hungary.

皮肉理解の発達：実験語用論の視点から

松井智子（東京学芸大学）

皮肉は、発話の言語情報と、発話を通して話し手が聞き手に伝えようとした内容との間に明らかなギャップがあることが特徴である。話し手は聞き手にそのギャップに気づいてもらうために、特徴的なイントネーションや表情、ジェスチャーなどを駆使して皮肉を相手に伝えようとする。聞き手が発話の言語情報と話し手の意図とのギャップに気づいたところから、そのギャップを埋めるべく、会話の文脈を考慮した発話の解釈が始まるのである。このように皮肉の理解のプロセスは複雑であり、解釈には様々な情報の統合を要する。そのために、子どもが皮肉を理解できるようになるまでには、二次の誤信念や嘘の理解ができるようになってから、さらに時間を要することがわかっている。本発表では、就学期の語用論能力の発達を、認識的警戒、心の理論、関連性に基づく話し手の意図理解という 3 つの要素に分けて検討し、皮肉理解の発達について実験語用論の視点から考察する。

［文献］

Matsui, T. (2019). Component processes of irony comprehension in children: Epistemic vigilance, mind-reading and the search for relevance. Scott, K., Clark, B. & Carston, R. (eds.), *Relevance, Pragmatics and Interpretation* (pp. 231-239), Cambridge University Press.

ASD 者における認知スタイルとコミュニケーションの選好性

藤野 博（東京学芸大学）

自閉スペクトラム症（ASD）の人たちの言語コミュニケーションの特徴として語用論の問題がある。その背景には「弱い中枢性統合」の問題があることが指摘されている。中枢性統合の弱さとは「木を見て森を見ない」認知の傾向のことであり、全体より局所に注目する情報処理の特徴を示した実験により明らかになった。その認知傾向は過剰な字義通りの理解、文脈と関連づけて言葉の意味を理解することの困難などに関係すると考えられている(Frith, 1989)。中枢性統合の弱さは障害とみなされてきたが、一方で、細やかな情報処理様式を認知スタイル(Happé, 1999)の問題として、より中立的に捉える観点もある。それは「障害」から「選好性」への視点の転換につながる。ASD 者は誰に対してもフォーマルで丁寧な話し方をする傾向があることを我々は報告したが、そのようなコミュニケーションの特徴は認知スタイルと関係する選好性の問題なのだろうか。そういったことについて検討したい。

［文献］

Frith, U., (1989). Autism: Explaining the enigma. Oxford: Blackwell.

Happé, F. (1999). Autism: Cognitive deficit or cognitive style? *Trends in Cognitive Sciences*, 3, 216-222.